九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

タイ研究における“loosely structured”の概念について

藤山, 正二郎
九州大学

https://doi.org/10.15017/2231557

出版情報：九州人類学会報. 3, pp.34-37, 1975-10-20. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

タイ研究における
“ loosely structured ”の概念について

九州大学　藤　山　正二郎

loosely structured とは，「loose な社会構造に基づく文化の相対的統合性の問題に関わるものであり，ここで loose な統合とは個人的行動の許容範囲が大きいことを意味している。」〔Embree, １９５０：P. ４〕。Embreeは，日本，ベトナムなどは固く組み合わされた文化で，タイに比べ互酬的な権利と義務を守ることが強調されていると規定して，loose を tight と対置して使用している。それ以来，２０年間，数多くの人類学的調査がなされ，その成果の１つとして，loosely structured概念の再検討が行われ，論文集として発刊された。その論文集の評価をしてみると，(1)いろいろな分析レベルの差異による混乱がみられ，議論がかみ合っていない。（national level と local level，文化と社会と心理の３つの分析レベル，統計的モデルと規範的モデル，地域差など）。(2)方法論的問題に終始して，タイ社会を分析するにどこから手をつけたらよいかなどの方向が示されていない。(3) Thailand in Comparative Perspective と表題にかかげながら，タイと似ていると思われるビルマ，スリランカの事例が少ない，などがあると思う。

例えば，Mulderは同書の中で「どのような社会においてもその成員は構造的・機能的に明確に規定された社会的地位と役割の中で相互作用を行っている。」〔Ｐ．１８〕と主張し，社会学的分析レベルでは loose ではないと，Embree を批判している。それに対し，Phillips は，「単にタイ社会の構造原理の究明でなく，タイ人はどのように振舞い，相手に対してどのように対処し合い，どのように感じ合っているか」〔Ｐ．２６〕に関心がある。この両者のように異なるレベルでの論争ではかみ合わない。

Embree の立場に近い Phillips は「個人的行動の許容範囲が大きい」，例として，「バンチャン村の成人のうち５９％は僧になるべしという制度的圧力を自ら進んで無視している。これは単に病理的現象や規範からの逸脱として説明されるべきものではない。」〔Ｐ．２６〕ことをあげている。しかし，彼のいう「自ら進んで無視した」事例は具体性に欠ける。僧にならなかったのは家族の労働力が足りなかったからかもしれないのである。彼はそこまで追求してはいない。

彼の loosely structured を支持する事例は逆に，タイ社会が loose でないことを示す例にもなりうる。東北タイで「１０６人の世帯主のうち，半分以上が僧を，1／3がnovice を，1／5が双方とも経験している。だから，僧になること，novice になることは通過儀礼とみなさねばならない。」〔Tambiah, 1970：P. 102〕、中央タイで「今日のタイで成人男子の半分は僧院生活を経験している」〔Bunnag, 1973：P. 37〕。「タイの男子は，２０才に達すると，一定期間（最低３ケ月）寺に入り，僧として修養することが文化的に期待されている。バンケム村の場合，第２部落の２０才以上の男性の７４％が，期間の長短はあれ

寺での修養の経験を有していた。」〔松永，１９７３：Ｐ．４２〕。統計によってモデルをつくる場合，サンプル数が多く，質的に広範囲にわたっていないと意味がない。僧を職業としている人数は統計に表われやすく，一時的出家者はつかみにくいが，「公式の統計によると５０才以上，仏教徒の男子で９７％が僧としてある期間をすごした。」〔Thailand Yearbook，１９６４：Ｐ．５０９〕。例えば，年令階級別に出家者の占める割合を示した統計によると，〔石井，坪内，１９７０：Ｐ．９〕。(1)若年層においてひとつのピークがあらわれること。(2)いわゆる働き盛りの年令（３０才〜４９才）において，出家者の割合が低減していること。(3)５０才を過ぎると，出家者の割合が増加しはじめ，この傾向は年令とともに高まること，を指摘している。「僧侶になるべしという制度的圧力を自ら進んで無視した」５９％の人は，将来年をとってから僧になるかもしれないのである。

寺や僧侶にコミットすべしというタイ人の規範は，例えば，托鉢にくる僧に食物を与えることを指標にしても検証できる。「１０６家族のうち，１３％が１９６１〜２年の間，与えなかった。しかし，これは若夫婦の家族で，親夫婦がその代わりをしていた。１７％が毎日与え，４２％が週に何回か与え，残りは月４回の聖日と雨安居の時に与える。」〔Tambiah，Ｐ．１４４〕。「３０％以下の人が毎日与えることはないと言っているだけで，その人たちも時々は与えている。僧の通るルートからはずれているから与えにくいのである。」〔Bunnag，Ｐ．１０５〕。これらの統計によると，タイ人の僧や寺へのコミットの規範に関しては，タイは loose ではない。だが，私は Embree が記述したタイの loose な面を全面的に否定するつもりはない。ただ，loose を強調する人があげる例が印象的で，あいまいなことを指摘したいのである。

「タイでは全土の１０％が耕地として使用されているにすぎない（１９５５）。多くの空閑地があったので自由民は無断で居着く権利をもち，土地を開拓し，耕作を営むことができた。タイの家族は，自家労働で食料生産も自給自足で，土地も個人所有が多い。水に魚あり，田に稲あり（Nai nam mi pla，nai na mi khao）はタイの自然の豊かさと，激しく働くことなく快適にくらせるという信頼感を表わした言葉である。」〔Bunnag pp．９－１０〕。このような経済的基盤が家族や社会集団の構造に反映してくる。機能的に意味のある社会組織の数が少ないこと，双系的相続などである。他に役割に深くコミットすることなく，役割間の移動がたやすく行われることなど，loose と思える面もある。

タイのように拡散した社会を「部族社会」から育った人類学理論で分析しようとした時，とまどいを感じるのは当然であろう。親族理論を中心とする African model のゆきづまりの中で，loosely structured の概念によせる期待がこの論文集をつくりだしたのだろう。Embree の問題提起をうけとめて，新しい理論も志向されている。個々の行為者が，現に直面している特定の役割や集団的状況に自己を一体化しないタイ人をEmbree は異常であるとみた。Piker はそれに答えて，役割期待の強弱，集団的状況に対する同調性の強弱に焦点をおいて，collectivity － bound structure と not collectivity structure の２類型をあげている。

後者の特徴として，

1. 社会的

(1) 社会組織の数が少ない。 (2) 社会集団の任意性。 (3) 社会的結合の不安定性。

2. 文化的

(1) 社会組織の形態と継続性を損うことなしに個人的性癖を表現しうる体系。

(2) 他人の意志は不確定であるという観念。

(3) 小乗仏教に示されるような位階秩序の開放性。

3. 心理的

(1) 独立性と依存性の二律背反的態度，動機の多様性。

などをあげている。〔PP. 68−74〕。しかし，これは新しい理論的枠組というより，今までの理論のうらがえしと思える。「特定の役割に自己を一本化しないタイ人」が異常かどうかも検討の余地がある。「人間は他の人間によって与えられる役割期待に同調し，それを現実化するだけではなく，むしろそれを選択的に認知し，推測し，時には修正し改変し，新たなものをつくりあげるものなのである。他者の見地に従うことは役割行動の特殊ケースであり，他者はあくまで手段である。Erving Goffman によれば，人間は社会からの役割期待に必らずしも一致した行動をとらず，しばしばそれから離れ，それと距離をおく（role distance）行動をとっているのである。」〔船津，1974：P. 148〕というような見方もある。

loosely structured の概念は，分析道具，比較の枠組としては有効性がないことは，この論文集の中で明らかにされてきた。タイ社会のように，親族関係を基調としない社会構造と文化をとらえる刺激剤として，この概念はその役割を果し終えたように思う。

では最後に，タイ社会をとらえる分析視点をどこにおくかについて，2，3の例をあげてみたい。

① Mosel が言うように，役割と結びついた地位はいつも，相対的に高いか低いかに関して区別されている。そして，その上下関係はdyadicであり，それ以上は発展しない。その関係の例として，得度式のスポンサーとordinand，patron と clients，先生と生徒，年上の親族と年下の親族，僧と俗人などがあげられる。それらの関係は主従関係のような一方的従属関係でなく，タイ的な人間関係があらわれており，分析視点としては興味深いと思われる。

② 比較的永続する関係のネットワークか，短期間の協同を分析視点としてとる。例えば，ao raeng のような労働の互酬的交換，人生儀礼，年中行事のような宗教的行動における人間の協同などがある。

③ Sangha，学校，寺委員会，学校委員会などの機能集団を分析し，それらと村落共同体の関係を分析する。

④ 宗教儀礼（特に，現代タイ社会でも，機能している仏教儀礼，僧になる儀礼，葬式など。）での宗教的経験がいかに日常世界にはねかえっているかを分析する。人間は，宗教的世界と日常的世界を行ききするうちに，宗教的経験を日常へもちこんでいるはずである。宗教儀礼は一つの単位をなしてい

るから，分析の焦点をあてやすい。そこで，宗教的象徴が媒介するエトスと世界を折出して，それがいかに日常世界での人間の行為を動かしているかを描く。（これらの点については**Clifford Geertzの著作を見よ。**）もちろん，宗教儀礼にみられる世界観とエトスがすべての人に内化されるとは限らないし，宗教的世界と日常的世界の連続性の度合いも，文化によって異なり，タイの特殊性も考慮しなければならない。宗教儀礼での世界観とエトスが一応分析されたら，日常世界で，それと対応する文化パターンをさがして，検証するのも一つの方法であろう。

（本稿は，綾部教授の下で作成した修士論文「タイにおける人間と行為－人間関係の文化的分析の一事例－」の一部分に加筆修正をあたえたものである。

引　用　文　献

Bunnag,Jane　1973 Buddhist Monk,Buddhist Layman. Cambridge University Press.

Embree,J.F.　1950 Thailand -A Loosely Structured Social System. A.A. vol.52 -in, Loosely Structured Social System: Thailand in Comparative Perspective. 1969 H-D.Evers(ed.) Yale University Press.

Mulder,J.A.N.　1969 Origin,Development and Use of the Concept of " Loose Structure " in the Literature About Thailand : an Evaluation. -in, ibid.

Phillips,H.　1969 The Scope and Limits of the " Loose Structure" Concept. -in,ibid.

Kirsch,A.T.　1969 Loose Structure: Theory or Description. -in,ibid.

Piker,S.　1969 " Loose Structure " and the Analysis of Thai Social Organization. -in,ibid.

Tambiah,S.J.　1970 Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand. Cambridge University Press.

船津　衛：１９７４年「今日におけるシンボリック相互作用論の位置」現代社会学Vol, 1, №1

石井　米雄・坪内　良博：１９７０年「タイ国における出家行動の地域的変異についての一考察」，東南アジア研究，Vol, 8, №1

松永　和人：１９７３年「タイ農村における『通過儀礼』の一考察　－Ban Khem 村の事例を中心として－」，九大比較教育文化研究施設紀要　№23